

である。されど休止することを知らないのは英雄の不運とでもいふのであらうか、彼の志は決して此の小天地に限ることは出来なかつた。即ち此の事業を土臺にして世界の四方八方に雄飛を試み、終にペルシャ、シリア、小亞細亞から南は印度の恒河地方に及び、東は天山の南北、北は歐羅巴の東に亘つてその威武を奮ふことになつた。實に彼の生涯に得た大勝利は三十五回と數へられて居る、今は彼の此等の飛躍についてまで、一々煩らはしい筆を運ぶ要はあるまい。ギボンの才筆が我等に教ふるが如く、彼の生涯の終りには、トランス・オキジアナの王冠は、彼が戴いた二十七個の中の一つであつたことを知れば充分であらう。たゞこゝに簡単な記述を省くことの出来ないのは、彼の畢生の目的であつた支那征伐の一條である。

彼は千四百五年四月一日の夜（アリーによれば、回曆八〇七年八月十七日にて、ザファルナーマには斯く換算するが、自己の換算によれば一四〇五年二月十八日、三正綜覽によれば一四〇五年二月二十五日と見ゆ。）支那征伐の途中シル河畔の訛打刺といふ地で病の爲に没したのである。この事は極めて普通に知られて居るが、しかしその支那征伐の事業は晩年諸國を討伐し終つて始めて彼の考へ出したものであるかのやうに記してある書物もないではない。けれども少しく細かに研究してみると彼の此事業は夙くから企てられたことであつて、實に千三百九十七年にはその爲に兵を集めたこともあつた。されど西方諸國の事情は如何にしても彼が遠く支那に向つて征途に就くことを許さなかつたので、終に遷延して此の時に及んだ次第であるが、とにかく支那の富貴と領土の廣大とは早くから彼の垂涎した處であつたことを知らねばならぬ。支那は當時明の世で、彼の千四百三年に位に即いた永樂帝は、僅か二年餘りの歲月ながら帖木兒と治世を同じふした譯である、此の不世出の兩雄が互ひに其の治の初めと終りと